

おごせ 教育 Pick Up



越生小学校

7月11日に4年生が地域包括センターの方から認知症サポーター養成講座を受けました。オレンジリングやサポーターは応援者で特別なことをする人ではなく温かい目で見守る人だと学びました。

梅園小学校

7月10日に2年生が、生活科で育てた野菜を使いサラダパーティーをしました。野菜づくりでお世話になった立川さんや1年生を招待し、楽しく過ごしました。心を込めて育てた野菜は、とてもおいしく、あっという間に完食となりました。



越生中学校

7月5日に、1・2年生の校外学習が行われました。1年生は川越、2年生は上野をそれぞれ班別行動で散策しました。班別行動を通じて自主性を高めると共に、楽しい思い出をたくさん作りしました。



おごせっ子広場

町内の小中学校や町の行事等に参加する子供たちを写真で紹介するコーナーです。

定員は12名ですが、今年度もすくすくいっぱいになりました。1学期は砂場で水遊びをしたり、絵の具や七夕の製作をしてたくさん遊びました。2学期からは時間も長くなり、お昼を食べて帰ります。また幼稚園でたくさん遊びましょう。



ホールでは、巧技台や平均台、鉄棒などを出し、雨でも体を動かせるようにしています。全学年が一斉に遊ぶので年長組のお友だちが、小さい学年の子をお世話してくれたり、やさしく接してくれたり、と異年齢での関わりが増え、自然と思いやりの気持ちが育ちます。

ズームイン教育265

幼稚園 たのしいね

越生みどり幼稚園

【雨の日も】

雨が降り、外遊びができない時には園舎内のお部屋を全て解放し、みんな一緒に遊べます。



越生浪漫

No. 128

越生人物往来⑥

尾張屋三平をめぐる人びと



「三滝入口」道標



尾張屋三平

- (左) 三月吉祥日
- (右) 東都 新吉原講中
- 助力 津久根講中
- と記されています。
- (裏) 大平山 龍塘木信書回廊
- 元治二乙丑歳
- 尾張屋三平
- (表) 日本第一 三瀧入口



「黒山三滝道」道標

同年6月建立の、黒岩歩道橋下の「黒山三滝道」道標にも尾張屋三平と新吉原講中の名が刻まれています。尾張屋三平こと新井宗秀は、文化12年(1815)、津久根村(現大字津久根)の生まれで、25歳の時、家業を弟に譲って江戸に出ました。北辰一刀流の千葉周作に入門して剣の腕を磨き、一方、遊侠無頼の徒とも交わり、新門辰五郎と義兄弟の契りを結んだとも伝えられています。新吉原の江戸町一丁目(現台東区千束)に「寒菊尾張」の暖簾を揚げ、尾張屋三平を名乗りました。慶応4年(1868)三月没。享年四十五。江戸市中に黒山三滝の名を広めた功労者です。筆者は、男滝、女滝、天狗滝

を「黒山三滝」と最初に総称したのは彼ではないかと推測しています。千葉周作 番匠村(現ときがわ町大字番匠)の蘭方医小室元貞が遺した天保4年(1833)三月二十二日の日記に「元貞、新堀初太郎え行き、帰路田島甚四郎え立ち寄り千葉周作に対面、木村定二郎、上州念流等試合の談承り候」と記されています。田島甚四郎家は、今市村(現越生市街地)の名主家です。先代田島七郎左衛門は、甲源一刀流の始祖逸見太四郎の高弟で、源武郷と称して禅心無形流を開き、自宅に道場を構えています。新井宗秀が、この道場に入りしていた可能性は大いにあります。なお、木村定二郎は千葉周作と対戦した神道無念流の遣い手です。また、上州念流は馬庭念流のことで、北辰一刀流との間で起きた抗争「伊香保神社掲額事件」の



千葉周作 wikipedia より

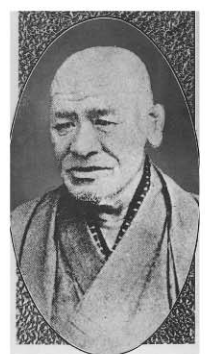


晴々舎角丈 (『其志遠李集』より)

話題が出たのでしよう。晴々舎角丈 新井宗秀の弟宗直は、材木商として財をなし、傍ら俳諧宗匠晴々舎角丈として知られた、当地を代表する文化人でした。明治17年(1884)59歳で死去しました。墓碑には「新井宗直翁 碑陰記 匏庵 栗本鯤撰」で始まる銘文が彫られています。難解な漢文ですが、角丈の追悼句集『其志遠李集』の覆刻版(平成六年/仲静治編・新井清次郎刊)に意識が抄録されています。「翁、姓は新井氏、通称を清次郎、晴々舎角丈の号は俳師春秋庵梅笠の授る所なり。翁は農鉄五郎の三男に生れ、二人の兄が農を厭い、その故に後を継いだ。村の北を流れる越辺川は荒川に合し江戸の海に入る。翁はここを有為の地と考え、山に入り木を刈り筏によつて江戸へ送つた。以前にもこれを業とする

者がいたが、皆洪水の際、材木を漂失して損害を受けた。翁は幸にその厄災を免れ、多年の拮据勉勵の末に鉅万の財を築いた」

栗本鋤雲 栗本鯤について、仲静治氏は「栗本鯤は旧幕臣で安芸守、三百石、鋤雲とも号した。幕府の医官栗本家を嗣ぐ。文久2年(1862)土籍に列し学問所頭取・軍艦奉行・外国奉行として徳川慶喜を補佐し、勘定奉行格となり箱館奉行を兼ね、またフランスに使用して親善を図った。幕府が瓦解して一時隠棲したが明治5年(1872)横浜毎日新聞社に入り、翌年郵便報知新聞の主筆に迎えられ才筆をもって紙上を飾り、成島柳北・福地桜痴らとともに名声を広めた。匏庵にこの撰文を依頼するにあたり仲介の労をとつたのは、当時角丈と親交のあった川越水川神社の神官山田もりの 衛居であると



栗本鋤雲 国立国会図書館「近代日本人の肖像」より

※註 越生町教育委員会『越生の文学碑と筆塚』平成元年